

新しくなったファーストクラス。シートを含め全体をブラウンの色調でまとめ、カーペットは落ち着いた赤を採用。

WELCOME! NEW SKY Vol.01

# JAL SKY SUITE 777

## 感謝とともに、新しい空へ

日本航空は2013年1月より、すべての座席と食事メニューなどを一新したサービスを開始する。その第一歩となるのが、東京(成田)=ロンドン線のボーイング777。生まれ変わったデザインとサービスには、そのすべてに日本のおもてなしの心を込める。第1回となる今回は、ご好評を頂いているファーストクラス。進化したJAL SUITEの詳細をご覧ください。

村松謙二(編集部)=文  
Text by AGORA

01 WELCOME!  
NEW SKY

**日** 本航空が大型のシエルで包まれた最初の「JAL SUITE」を導入したのは2008年8月。1機あたりわずか8席とされたその空間は、1人当たりの占有面積は既存のファーストクラス(JALスカイスリーパーソロ)比で約20%拡大した。あれから4年余り。新しいファーストクラスはどう変わったのか。

藤島浩一郎だ。

「今回のリニューアルは、『ひとクラス上の最高品質』がテーマ。すべてを見直しました」と語るのは、日本航空商品サービス開発部の、

「まず、整備の担当者に現行JAL SUITEの問題点を徹底的に洗い出してもらいました。例えば、ソファをベッドに変える際、わずかですがアームレストの動きがスムーズにいかないケースが何度か発生しました。よりスムーズに動くように、部品ひとつひとつの形状を確認し、微調整しました。次に質感です。お客さまが触れられる場所がすべてに快適であるよう、検証を重ねました。例えばシユラウド(壁)の内側で、お客さまがお休みになる際に手や身体が触れる部分には、ストレスを軽減できるよう、肌触りの良い人工皮革を張り込みました」

シートやテーブル、コンソールの色調も、従来のアイボリーからブラウン系に替えられた。

「機内の光量に合わせて、美しい革の風合いと肌触りにこだわったシートとなりました。ご自宅の書斎や寝室と同じように寛いで頂けるよう、私たちは快適な自宅の一室を創るのだと、燃焼・強度という安全要件をひとつひとつクリアしながら、粘り強く開発を進めました。コンソールはシンプルで美しく機能的である日本の伝統、様式美を意識しながら、最先端の機器を設置、加えてコントローラー類はユニバーサルデザインに基づいた使いやすい形状・配置にしています」

筆者の身長体重は180センチ100キロ。新しいシートに座ったときの感想は一言で「気持ちが良い。足を組んでもゆったりと座ることができ、アームレストの高さや幅もちょうど良い」。

そして美しいのだ。例えば新開発された23インチのディスプレイは、前方のシユラウドにバランス良く設置された。大きな力を使わずに動かすことのできる可動式のテーブルは、ラップトップのパソコンをゆったりと置くことができ、安定している。電源などのジャックも上手に配置され、決して乱雑にならない。パソコンを使い終わったら、テーブルを少し押し、足を組み、寛ぎながら資料を見る。

リクライニングされたシートに寝転がって読書。どちらのサイドに寝転がっても、用意されたライトで十分な光量を確保。



1 ベッド長199.4cm シート幅58.4cm、世界最大級の広さを誇るベッドに変身した「JALスイート」。テンピュール社の寝具が深い眠りを誘う。2 23インチの液晶ディスプレイ。デザインも美しさも改善された。3 オットマン下の収納スペースには、十分な広さが確保されている。4 シートサイドのコンソール内にはA4サイズ相当のアタッシュケースを収納することができる。

01 WELCOME!  
NEW SKY

確かにほぼ書斎に居る時の動作をしていることに気づく。

スイッチを操作してフルフラットに変えてみる。シートというよりも、やはりこれはベッドになる、と言っても過言ではない。シングルサイズのベッド幅に匹敵するサイズは、寝返りも楽に打つことができ、閉塞感は覚ええない。クルーグにお願いしてベッドのセッティングに変更してもらい横になると、ここが取材用に設置された会場であることを忘れそうになる。クッションや枕、掛け布団は好みもあるだろうが、ゆったりと眠りにつくことができるだろう。

中央2席並びの席には、隣席とコミュニケーションをする必要に応じて、開閉可能なパティションを設置している。例えばご夫婦で搭乗され、食事を召し上がって頂く際には、会話を楽しみながら、過ごして頂ける。

「スライド式のドアをつけて個室化してはどうか」という意見もありましたが、つねにお客さまへの配慮が行き届くよう、あえてこの形といたしました」と藤島は語る。コンソール内には小ぶりのアタッシュケースも入る。側に置いておきたい書類などはこちらに収納

できるだろう。開け閉めを数回繰り返してみたら、こちらも使い慣れた書斎のサイドテーブルと同様に、大きな力を使うこともなく軽く手首を動かさず感覚で開閉ができた。

「開けやすい、閉めやすい、けがをしない、そして故障をしない」ということがこれらの製作要件になります。当たり前のことですが、ここでも多くの議論の積み重ねがありました」

可動式で3段階に光量が調節できる読書用のライトも2カ所に設置され、左右どちらに寝転んでも灯りを確保することができるのもいい。航行中は機首が若干上がることから、グラスを置くテーブルにはわずかに傾斜がつけられているのも、スマートだ。

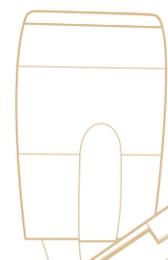
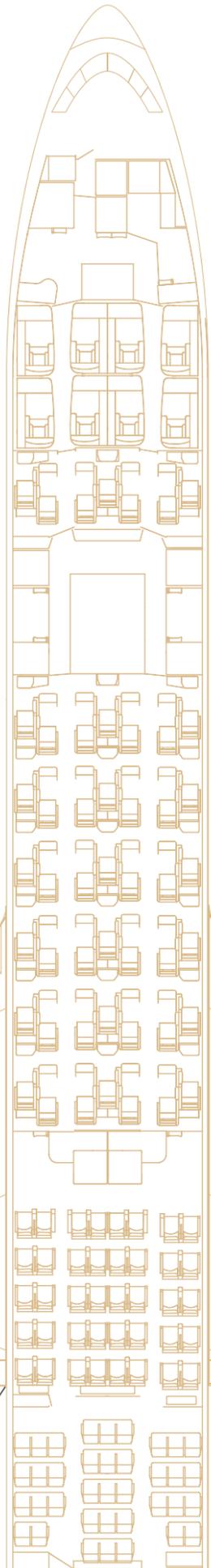
日本航空にファーストクラスが生まれて半世紀以上となる。古くは和室を模したファーストクラスも作られたりした。ハードウェアにおいてはサービスは時代を経て進化していき、その時代に在る最先端の技術が可能な限り搭載される。しかしその根底にあるものは、世界でもたびたび賞賛される日本の「お客さまを「おもてなしする心」だ。こちらは、時を経ても変わることはない。



日本航空は日本の食料自給率アップのための国民運動「FOOD ACTION NIPPON」に参加。推進パートナーとして様々な活動を行っている。写真はすべてメイド イン ジャパンのチーズ。



ファーストクラス搭載のひと皿。「龍吟仕立ての“穴子”の煮込み オロロソシェリーの香りの車海老を添えて カフィアライムのソースと山葵のシャンティをからませて」成田発：ニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルス、ロンドン、パリ、フランクフルト線のみ。



さて、機内サービスの楽しみといえば機内食だ。日本航空では欧米線、豪州線、東南アジア線の機内食を「空の上のレストラン」というコンセプトで、今迄の機内食サービスの枠を超えた魅力的な食事の時間を提供する。今紹介するファーストクラスはビジネスクラスとともに、「スカイオーベルジュ BEDD (ベッド)」と名付けられた。

お腹が満たされた後は、座席をベッドにして、お休み頂けるシーンを想像させる「BEDD」という名前の最後の「D」の文字には、「Dine(お食事を愉べ)」「Delicious(おいしい)」「Dream(夢)

WELCOME!  
NEW SKY

見心地」の意味を込めた。

料理を供するメンバーは「日本料理 龍吟」の山本征治シェフ、「エディション・コウジ シモムラ」の下村浩司シェフ、料理プロデューサーの狐野扶実子さん、麻布十番「山田チカラ」の山田チカラシェフの4名。スターシェフと料理プロデューサーで結成するドリームチームが、最高の食材と自由な発想で夢のスペシャリテを考案、基本3ヵ月ごとにメニューを替え、提供される。

「お皿の上の美しさやおいしさはもちろんですが、食材の香りも大切にしています。例えば香り付けに使われるゆずの皮などは、料理を席にお持ちする直前に機内ですりおろします」とは担当者の弁。

供されるお米は、お米マイスターが厳選した最高級の、新潟県南魚沼産コシヒカリを2012年2月より採用。豊かな雪解け水、肥沃な土地、昼夜の気温差の大きい山岳地特有の気候と、先人から受け継がれてきた技、生産者の努力により作られた高品質のお米を、機内で炊飯、炊きたて熱々をご提供する。

ちなみに食後のチーズはメイドインジャパン。北海道や長野、千葉で愛情を持って作られた5種類のチーズはどれも逸品。

新しいサービスに携わったすべてのスタッフには「感謝を忘れず、お客さまのために——」という揺るぎない意志がある。それは今もこれからも、続く。

Boeing  
777